

氏 名 陶 琳

本 籍 中国

学 位 の 種 類 博士 (文学)

学 位 記 番 号 社博甲第 45 号

学位授与の日付 平成 14 年 3 月 22 日

学位授与の要件 課程博士 (学位規則第 4 条第 1 項)

学位授与の題目 日本語・中国語・英語における丁寧表現の比較研究
(A Comparative Study on Politeness In Japanese, Chinese and English)

論文審査委員 委員長 大 瀧 敏 夫

委 員 大 瀧 幸 子, 柘 植 洋 一

学位論文要旨

本研究の背景

近年,日本の言語学界においても敬語行動に対する関心が高まり,それをテーマとする論文も目立って多くなった。しかし,異言語間の体系的な比較研究はまだ始まったばかりであり,日・中・英三言語の比較研究は非常に少ない。急速に国際化が進む現代社会では,異文化交流は拡大の一途をたどり,異なる文化を背景にもつ言語行為に関する研究,とりわけコミュニケーションを円滑にする潤滑油の役割を果たす丁寧表現の研究はきわめて重要なものと考えられる。本研究の根底には,異文化間コミュニケーション・ギャップを解消するための的確な情報を提供し,より円滑な異文化間コミュニケーションの発展に貢献したいという願いがある。

本研究の目的

本研究はコミュニケーション理論と語用論を基礎とし,社会言語学の立場から日・中・英語三言語の丁寧表現の「多面的かつ全体的な比較研究」をすることによって,丁寧表現全体が現す人間関係のあり方,更には各言語の文化の特徴,人々の価値観,男女,世代による表現効果意識の差等を考察する。

ところで,欧米で最も注目された Brown & Levinson の敬語行動理論 - 「Face 理論」は,ポライトネス (丁寧表現) にとって重要であり,かつどの文化,どの言語においても普遍性を持つ理論であると言われている。確かに【面子】という概念はコミュニケーションを順調に行うために考慮すべき重要な要素と思われる。しかし,これまで,日・中・英三言語における【面子】の意味概念,【面子】に対する意識と価値観に関する詳しい研究は存在しなかった。さらに Brown & Levinson の「Face 理論」が日本人と中国人に対してどこまで適用できるか,日本人,中国人,英語圏の人々が丁寧表現に対してどのような認識をもっているか,日・中・英三言語における丁寧表現にはどのような特徴があり,コミュニケーション上どのような機能を果たしているか,言葉によって「丁寧さ」の程度をどのように増やすことができるか,文のさまざまな構成要素がどのような形で「丁寧さ」を表現しているか,といった問題については,いまだ十分には明らかにされていない。

そこで,本研究が目的とする「丁寧表現の多面的かつ全体的な比較研究」を進めるために,本研究独自の具体的な課題として 6 項目を立てた。

研究課題 (1)

Brown & Levinson の「Face 理論」の“Face”という概念が日 (メンツ)・中 (面子)・英 (Face) 三言語の語彙体系においてどのように位置づけられるかを明らかにする。そのために辞書の記述を調

査して、各言語の「メンツ・面子・Face」に関する類義語関係を整理する。この類義語の分析を通して、日・中・英三言語の文化圏における「丁寧さ」に関する概念用語の体系の異同を明らかにする。

研究課題(2)

(1)の分析結果を参考にしつつ、アンケートにより、日中両国における概念用語の使い方の実態を調査する。さらに日本人と中国人が社会生活を営む上で、【面子】という概念と Brown & Levinson が掲げた丁寧表現の 40 種類のパターンを意識しているかどうかを調査する。

研究課題(3)

井出(1986)が日本、アメリカ文化圏の待遇表現の差異を「ペンを借りる」場面で調査した結果を参考にして、本研究では中国のネイティブスピーカーを対象に、中国語でどのような待遇表現をとるかについてアンケート調査を行う。そして、日・中・英三言語における丁寧表現の「丁寧さの程度」を表すさまざまな構成要素、文の長さ、「丁寧さ」の関係、ストラテジー(方策)の異同等を明らかにする。

研究課題(4)

褒め言葉に対してどのような待遇表現が選ばれるか、日本、中国、英語圏のネイティブスピーカーにアンケート調査を行う。このアンケートでは褒め言葉ごとに、その賞賛(褒め言葉)を受け入れるか受け入れないか、またその意志は何に基づいて決定されるか、という心理調査を行う。次に、返答の中で、どのようなポライトネス・ストラテジー(方策)が用いられるのかを考察し、その異同を明らかにする。

研究課題(5)

日・中・英三言語における丁寧表現にはどのような相違点や特徴があるのかを検討し、それぞれの丁寧表現の構造を明らかにする。あわせて現在日本人、中国人は敬語を使用することについてどのような意識を持つのか、アンケート調査し、その異同を解明する。

研究課題(6)

丁寧表現の構成要素全体を整理し、その言葉の用い方について、日本人、中国人、英語圏の人々にはそれぞれどのような発想の違いがあるのか、①呼称、②挨拶、③感謝、④別れの挨拶、⑤決まり文句などを比較対照することで明らかにする。また、各言語の決まり文句に現れる文化の差異についても考察し、コミュニケーションにおける不必要な摩擦を回避するための提言を行う。

以上の6項目の研究課題とその研究方法を設定した理論的背景には、丁寧表現の差異を「メンツ・面子・Face」に関する価値観の差異としてとらえる異文化比較研究の視点がある。その視点から、6項目の研究課題は次のように関係づけられた。

研究課題(1)(2)の考察を通して、【メンツ・面子・Face】に対する日本人と中国人、英語圏の人の意識と価値観を検証し、各々のネイティブスピーカーが自覚している丁寧表現のあり方を研究する。(3)と(4)では日・中・英三言語における丁寧表現の相違点と共通点を明確にするために、具体的な場面で話し手と聞き手の上下関係、親疎関係がどのように影響するか、それがまた丁寧表現の構成とポライトネス・ストラテジーの種類にどのように関連してくるかを考察する。さらに(5)と(6)では日本語の丁寧表現の中核である敬語と敬語意識について検証をすることと、日・中・英三言語における丁寧表現の構造と全体の構成要素を明確にし、それらをさまざまな待遇表現として総合的な観点から比較対照する。

本研究の方法

本研究は、文献調査とアンケート調査を通じて、データを収集・検討し、その特徴を示す。それによって、日・中・英に於ける丁寧表現の多種多様な様相を考察することになる。アンケート調査の対象者は、丁寧表現についての知識を持つインフォーマントを想定し、学生及び、公務員、先生、社員等一定以上の知識層の日本人、中国人、英語圏の人々である。

本研究の結果と考察

日・中・英三言語における丁寧表現の考察の「多面的かつ全体的な比較研究」として、本研究の結論は、次のようにまとめることができる。

1) 丁寧表現の基盤となる【面子】は日・中・英語圏の社会で対人関係や日常生活におけるコミュニケーションを順調に行う為に重要な役割を果たすものとも考えられるが、【面子】の概念は様々である。本研究は日・中・英三言語におけるそれぞれの【面子】シソーラスの特徴を明確にした。辞書及びアンケート調査結果によると、日・中・英三言語のシソーラスと【面子】概念が異なることが分かった。日本の「メンツの意味概念」は「メンボク」「タイメン」「名誉」という三大要素であること、中国の「面子の意味構造」は「面子」「情面」「体面」という三大要素であり、英語の「face 意味構造」は「honor」「respect」「reputation」という三大要素である。アンケートの調査結果では、シソーラスを示すことと異なる。男女、世代間の差が小さくないことも分かった。例えばアンケートの調査結果では、日本の男性は「メンボク」「タイメン」「世間体」であり、女性は「体裁」「世間体」「タイメン」であることを明らかにした。また中国の男性は「自尊心」「体面」「尊厳」、女性は「名誉」「榮譽」「羞恥」「自尊心」であることを判明した。

2) アンケート調査結果から日本人も中国人も、自分たちは「【面子】を重んじる」文化を有すると認識して、【面子】の認識と価値観及び丁寧表現の認識を持ち、同じ国でも、男性と女性の面子意識と価値観が違うことも明らかになった。又、Brown & Levinson のいう積極的の面子と消極的の面子を脅かす言語行為は日本人にとって当てはまる点が中国人よりやや多く、日本人には、面子とは関係ない言語行為だと思われることが多いことを判明した。さらに、Brown & Levinson の積極的のポライトネスと消極的のポライトネスは日本人と中国人のそれと共通点があるが、間接的に表現するポライトネス・ストラテジー（方略）は日本人と中国人にとってはあまり当てはまらないことを解明した。このことから、Brown & Levinson の「Face 理論」は日本人と中国人には部分的にしか適用しないといえることを実証した。

アンケート結果から知られる三言語圏の丁寧表現の相違について、その価値観とあわせてまとめてみれば、個人主義を守る態度とそれに由来するコミュニケーションの仕方である西洋の丁寧表現、「タテ」組織における年功序列制と上下関係に由来する敬語を中核とする日本語の丁寧表現、「礼」の精神に基づく交際の礼儀原則に由来する言葉遣いに配慮する中国語の丁寧表現の相違、となるであろう。この相違が各言語圏の人々が好んで用いるポライトネス・ストラテジーの相違に直結するのである。

確かに【面子】を重んじて潰さない言語行動はコミュニケーション成功の一要因と考えられる。しかし、日本人、中国人、英語圏の人の【面子】観と対人関係の【面子】意識は様々でない。中国人と日本人は対人関係において、特に相手と他人に配慮し、「和」を保つために自分の、相手の、他人の【面子】を重んじているといえよう。したがってそのコミュニケーションは「和」を損なわないことを重視する。一方、英語圏の人は対人関係において、個人の自由度に配慮し、個人の尊厳が冒されないように、自分の、相手の、他人の【面子】を重んじているといえよう。したがってそのコミュニケーションは自分と相手の「Face」を損なわないことを重視する。このように本質的な相違があるのだから、Brown & Levinson の「Face 理論」が日本人と中国人について全面的には適用されないのは当然なのかもしれない。

以上の研究は従来の研究と異なって、対人関係におけるフェイスの役割を比較対照する視点から、日・中・英三言語の【面子】の概念、各言語圏の人々の【面子】に対する価値観および丁寧表現に対する認識の相違を明らかにしたものであり、本研究独自の研究成果と考えられるであろう。

3) 日・中・英の「ペンを借りる」「依頼」に用いられる丁寧表現の比較では幾つかの共通点と相違点が見られた。共通点としては

(1) 物を借りる際の「依頼」の丁寧表現は多くの言語要素から成り立ち、その丁寧度はそれらが複合してできる複雑なものである。

(2) 丁寧な表現ほど長い傾向がある。類型がさまざまである。

(3) 丁寧な表現にはバラエティがあり、一つでも丁寧表現要素が加わると表現全体の丁寧度がそれぞれ上がる。

相違点としては

(4) その表現形式は一致していない。日本語では文末、中国語では文頭と文末、英語では文頭と文中で「丁寧さ」の言語要素を用いる。

(5) 相手の人物カテゴリーに対する丁寧度については、日米を研究すると、アメリカの人間関係は親疎の程度により丁寧表現の程度が変化し、日本は社会的地位によって丁寧表現が変化し、親疎には影響されない傾向がある。中国では、日本のように社会的地位がはっきりしている場合はあまり親疎に影響されず、社会的地位がはっきりしない場合は親疎に関係する特徴を持っている。

(6) 井出他(1986)の日米比較研究では、日本は表現と人物カテゴリーに相関関係がくっきりと見える「クッキリ型」で、アメリカは表現と人物カテゴリーに相関関係がなく、「ボンヤリ型」と言える結果を出していた。本研究の結果を見ると、人物カテゴリーや親疎に関係なく気楽に接する相手には日米とも、気楽な表現を使い、社会的地位に関係なく丁寧に接する相手には丁寧な表現を使うことで、その点ではどちらの型ともはっきり言えないことが分かった。

4) 社会的な上下の人間関係、親疎関係等による日・中・英三言語の丁寧表現の使い分けを明らかにするために、褒め言葉への返答について丁寧表現の分析を行った。三言語にいくつかの共通点と相違点が明らかになった。共通する点の主要ものは

(1) 同じ褒め言葉の命題内容の言語形式に対して、上下関係、親疎関係に応じてその場面に意味あるものを読み取り、その場にふさわしい言語形式を選択することも分かった。つまり、同じ褒め言葉に対して、環境コテキストによって、異なる丁寧表現の答えがあることが証明された。

(2) 真面目な褒め言葉なら、受け入れる。お世辞など事実ではない褒め言葉を受け入れたくない時、相手の面子を潰さないように相手を「褒め返し」「逸らし」「微笑」「情報」などの丁寧表現で答える。また、褒め言葉をそのまま受けたいが、自分の面子を保つ為に、「褒め返し」「逸らし」「打ち消し」「微笑」等謙遜の言葉(日・中)で答える。特に、本研究が注目したのは「感謝」「褒め返し」「情報」「シフト」「冗談」「逸らし」「謙遜」「疑問」「微笑」などのストラテジーは受け入れる、受け入れないに関わらず表現効果があると意識していることである。

(3) 三言語とも褒める言葉を受け入れる率がかなり高く、全体的に見ると、上下関係より「ウチ／ソト」という親疎関係の差の方が大きい。親しくない人(ソトの人)に対しては、受け入れる率が目上、目下、親しい人より少し低い。

日・中・英三言語で相違するものは

(1) 褒め言葉への返答が上下、親疎関係によって三言語で異なる。

(2) 「謙遜は美德」というような考え方の丁寧表現は、英語圏の人々と違って、日・中の人々に多い。

(3) 受け入れる返答については、目上、目下、親しい、親しくないの四場面とも中国語のポライトネス・ストラテジーの類型が一番多い。受け入れない返答については、目上、目下、親しくない場面で日本語のポライトネス・ストラテジーの類型が一番多く、親しい場面で中国語の類型が一番多い。

これまで褒め言葉への返答類型の研究はHolmes(1987, 1988, 1993)のニュージーランドとマレーシアの研究、Robert(1989)のアメリカと南アフリカの研究、Chen(1993)の英語と中国語の研究、寺尾(1995)の日本語の研究などがある。しかし、それぞれ返答スタイルのデータが不十分であったり、分類の方法が不適切であったり、分析が不十分であったりする欠陥がある。これらの先行研究と比べて、本研究は全面的、総合的な研究と言える。

5) 日本語・中国語・英語の敬語、丁寧表現に関するカテゴリーを取り上げてその全体構造と個々の表現の特徴と敬語意識を見た。その結果、各言語の敬語、丁寧表現の類型を浮き彫りにしただけでなく、一般的にその言語の文化的特性も明らかにした。比較すると、最も異なる点と見られるのは、日

本語の敬語表現がステレオタイプな形式にかなり発達している一方、中国語と英語は丁寧表現が形式化しているものが少ないことである。いずれも純粹に一つの種類の表現しかないわけではなく、数多くの種類の丁寧表現を持っていることは日・中・英の敬語、丁寧表現の特色を表わすと同時に、それぞれの言語に見られる特有な要素が普遍的に存在することを示唆している。

敬語意識についての日中の比較対照では、両者において社会的上下関係の他に、医師と患者、店員と客などの立場関係が存在していて、敬語は上下の人間関係および立場関係を映す役割を果すものだという意識が強い。中国語においても個人差、男女差はあるが、日本語と大体似た敬語意識が存在する。また、敬語などの丁寧表現を使用する場合、英語圏の人々に比べて、日本人も中国人も人間関係等の人的要素や場面要素を強く意識している。調査の結果では、中国人は「面子を保つために敬語を使う」という認識は弱い、「面子は敬語と関わる」と認識し、かつ「対人関係に【面子】は必要である」と認識している。この点は日本人より強いことが判明した。また、日中間の相違といえば、異性間で敬語を使う意識の差が挙げられる。さらに中国人と日本人は「自分の面子を保つ」ためだけでなく、他人を尊敬したり、相手の尊厳を保ったり、自分の品格を示したりする時に敬語を使うことがわかった。

本研究は、これまでなされたことのない日本人と中国人の敬語意識の比較を試み、それぞれの敬語と面子との関係に関する意識、敬語を使う意識などについて、共通点と相違点を明らかにし、さらに世代間の差、男女間の差を指摘することができた点で、今後の同様の研究に対する基礎を築いたものと言えるであろう。

6) 丁寧表現は多様な言語層で構成される。本論文は三言語の丁寧表現の構造並びにその構成要素を整理し、かつ呼称、挨拶、決まり文句に絞って丁寧表現を比較してみた。呼称は中国語の丁寧表現において比重が高い。それに対して、日本語の丁寧表現においては挨拶、決まり文句の比重がわりに高い。英語においてはいずれも比重が低く、特に決り文句の代わりに、間接的な言い回しによる多様な丁寧表現に比重が置かれる。対人関係において、これらの間接的な言い回し、敬意を表わす呼称、挨拶、決まり文句は、言語コミュニケーションの潤滑油ということができ、どの言語でも共通のものと思われる。また、日本語・中国語・英語における丁寧表現の構成要素、構造を全体的に解明した。

以上6つの結論を総括して言えば、本研究は丁寧表現についての異言語間比較への新しい試みの一つである。更に、その丁寧表現の共通点と相違点を明らかにしたことにより、従来の研究に足りなかった多様性と普遍性を指摘することができた。

今回の研究はこれまでの二言語間比較では得られなかった可能性を示唆するものと思っている。しかし、これら三言語の複雑な丁寧表現の実態におけるそれぞれの特徴とその普遍性を明らかにするためには、今回のようなアンケート調査のみならず実際の会話分析の必要も感じている。様々の発話行為の中に、丁寧表現や【面子】がどのような役割や機能を持つかなど、今後更に研究を発展させたいと考えている。

Abstract

Politeness has become a major concern in pragmatics ever since the late 1970s. Brown and Levinson's politeness theory, first published in 1978, explains politeness as a linguistic method of saving 'face' (the individual self-esteem) and generated a wealth of conceptual and empirical reformations, in the theoretical and methodological traditions of a number of social sciences. Actually, the notion of 'face', as used by Goffman, originated in China and was imported to Europe. How the politeness theory is linguistically realized is different from culture to culture. How this theory is exemplified in the different languages depends on the individual, the nation, the language, the culture, the society and the customs.

This study introduces the results of some questionnaires made up on the basis of Brown and Levinson's theory about the perception and evaluation of [Face], the use of polite expressions, the perception of honorific language by the Japanese and the Chinese, polite expressions of lending a pen, and politeness strategies to respond to compliments by the Japanese and the Chinese and English speakers. We reexamine Brown and Levinson's framework in contrast with the notion of 'face' and modes of linguistic politeness in Chinese and Japanese. We explore the similarities and differences in politeness phenomena among them. We also compare Eastern culture with Western culture, with special reference to English. We describe the data in further detail through our investigation. The findings of this study point to some similarities and differences in politeness in three different culture groups. The topics involved sex-based differences, and the relative status and solidarity between the speaker and the hearer. We have analyzed these findings according to the politeness theories.

The study shows that the Japanese and the Chinese have a different perception and evaluation of [face] and the use of polite expressions. Brown and Levinson's "positive and negative politeness strategies" partly apply to both Japanese and Chinese. But, indirect politeness strategies do not apply to the Japanese and the Chinese. Politeness not only differs greatly across speech communities and the social values of culture groups but also may vary greatly one from another. In general, the result shows that politeness and honorific language are still a means of expression by which a speaker shows his or her good feelings to the hearer for better communication, and serve an important function as a kind of social etiquette, and can be used as communicative lubricants for maintaining good human relations. Therefore we hope that this kind of comparative study will afford a deeper insight into the sources of cross-cultural communication and will promote mutual understanding and smooth communication.

論文審査結果の要旨

陶氏の論文は日本語、中国語、英語の丁寧表現を多面的かつ総合的に比較した研究である。言語学、コミュニケーション学において近年敬語行動研究に関心が高まっているが、異言語間の体系的な比較、特に日、中、英3言語の比較研究は殆どないといってよい。その点でも陶氏の研究は貴重である。丁寧表現を3言語で比較するといっても、丁寧表現を構成する要素に敬語やポライトネス（心配りの）表現など言語間での食い違いが多々ある。陶氏はそれを先ず Brown & Levinson のポライトネス理論、それもその基本的概念の「面子」を手がかりに日本人、中国人、英語圏の人々の意識と概念の差を明らかにしている。その上で丁寧表現の意識や用法を人間関係・立場関係など社会的見地から、あるいは「褒められた」場合での3言語の相違も探っている。更に先行研究を綿密に調べ、それを補うかたちで敬語や間接表現はもとより微笑などの非言語表現まで丁寧表現の構成要素全体を洗い出して整理している。またその個々の表現カテゴリーに対する意識の相違など心理的要素も明確にしている。

これらの基礎研究をもとにした丁寧表現に関する意識調査では、6（補充調査を加えると8）種類のアンケート（「面子意識とその価値観」、「ポライトネスの認識」、「丁寧さの表現度」、「褒められた場合などの「丁寧表現」意識」、「物を借りる場面の丁寧表現」、「敬語表現とその意識」など）をそれぞれ3言語に、それぞれ400人を対象にして行い、その膨大な量のデータを精力的に集計、分析している。分析結果としては、たとえば日本人の意識が世間に向いていて人間関係・立場関係により丁寧表現が変化し、表現は敬語や決り文句が多いこと、英語圏は人の親疎関係で変化し、自己中心的で表現も固定的でないこと、中国人はその中間で意識が自己中心적でありながら社会的地位で呼称敬語など固定的であることなど丁寧表現における異文化間での差異を明確に指摘している。

検討会では、文化的背景、アクセントや書き言葉などにも言及すべきという意見も出たが、それらの点も追求するとなると更に膨大になり纏まりがつかないと判断し、意識的に省いた経緯がある。今後それらを行うためにもこの度の陶氏の全般的な基礎研究と特定の実証研究は必要かつ有効なものであり、審査員一同この論文を博士論文として充分であると判断し合格とした。